

べさするのは、甚だ宜しくないと云ふことが書てある、けれども堀の自殺は別に理由があつたので、安藤を諫めて死んだ譯ではない、が尊攘黨の有志者が堀の自殺を利用して、斯る文章を偽作したのには違ひない、或は大橋順藏が書いたとも云ひ、又は大橋の門人が書いたと云ふ説もあるが、其文章の冒頭は「鳥の將に死なんとする其鳴くや悲し、人の將に死なんとするや、其言ふや善し」と云ふ起しで、實に名文であるから、尊攘黨の壯士が之を讀むと、實に切齒扼腕に堪えなかつたろうと思はるゝ、それで久阪玄瑞等が堀次郎と云ふ奴は斯やうな不敬な事を調べた奴であるから、大義に於て活かしては置けぬ、是非天誅を加へなければならぬ、と云ふ議論から殺したのである、それで殺した翌日三番町へ其趣意を書て捨札をしたのである、其捨札の文章は、

堀 次 郎

此者儀昨年安藤對馬守と同腹致し、兼て御國体をも辨へながら、前田



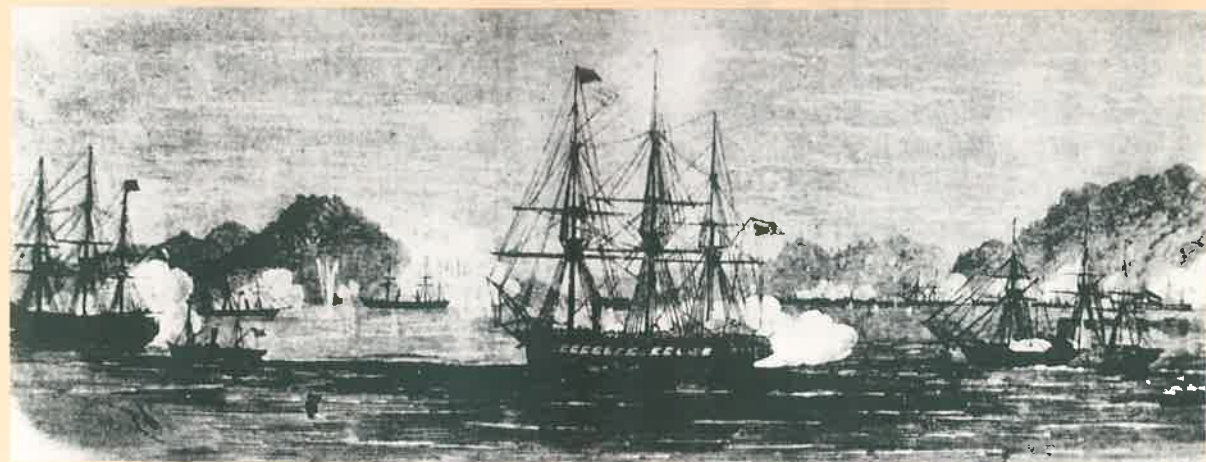
幕末之防長 全編是活劇

伊藤公實録

中原邦平著

限定五百部復刻

マツノ書店



目次

- 第一 一家系出生及幼年時代
 - 第二 出身及來原良藏との関係
 - 第三 松陰門下の公
 - 第四 桂小五郎随従時代
 - 第五 形勢の激變と同志の活動
 - 第六 藩論一變と來原良藏の自殺
 - 第七 彦根探偵と壮士的活動
 - 第八 洋行
 - 第九 長州の攘夷と雪冤運動
 - 第十 英國公使との交渉と帰藩
 - 第十一 開國論の主張と姫島の決答
 - 第十二 復命後の境遇と京師變動
 - 第十三 聯合艦隊の來襲と止戦條約
 - 第十四 修交使節の横濱行
 - 第十五 長州征伐と藩論の瓜分
 - 第十六 正俗兩黨の戦
 - 第十七 洋行の中止と馬關開港論
 - 第十八 薩摩聯合と銃艦購入
 - 第十九 薩摩と英佛
 - 第二十 四境戦争當時の行動
 - 第二十一 薩長英の修交
 - 第二十二 長州處分と討幕の計畫
 - 第二十三 三藩の出師と討幕の密勅
 - 第二十四 王政復古の大號令と長兵の入京
 - 第二十五 討幕の師と外交
 - 第二十六 版籍奉還と廢藩置縣
 - 第二十七 臺閣閱歴
- あとがき 一坂太郎

復刻にあたって

この九月、伊藤博文の生誕地、山口県熊毛郡大和町に「伊藤公資料館」が設立されるので、それを記念して伊藤博文関係の史料を復刻することになりました。数ある関係書の中から厳選した二冊は「政治家でなく、家庭人として」その人間性を深く浮き彫りにする、末松謙澄の『孝子伊藤公』、そして「維新後でなく、幕末」を駆け抜けた志士・伊藤春輔、波乱の青春を描く、中原邦平の『伊藤公実録』です。

生い立ち、史観、手法など、あらゆる面で対極にある二人の歴史家が、全く別の方向から日本近代史の巨人にライトを当てるさまは見事です。

『伊藤公実録』は、明治維新までの志士の時代だけを扱っている点では、三年前に小社の復刻した『井上伯伝』と同じですが、両書の内容はほとんどだぶっていません。

『伊藤公実録』も『孝子伊藤公』も、明治四十三、四十四年に刊行されて以来、一度も復刻されておらず、この二十一年間、小社の古書目録にも登場したことのない、希覓本中の希覓本です。

百年近くの歳月を耐え、今なお光彩を放つ第一級の史料を、これからさらに百年後まで伝えていく「三度貼りの重厚な製本」でお楽しみ下さい。



■体裁 A5判 七二四頁
 三度貼り 上製 箱入

■定価 一万円
 9千円(¥450)

■予約特価 九千円(¥450)
 平成九年七月末日

■発売 平成九年九月上旬

限定五百部復刻(番号入)

▼セット特価は「申込用紙」をご覧ください。

▼僅少数の復刻なので、売切れの際はあいはいはご容赦下さい。

山口県熊毛郡大和町一丁目
 山口県徳山市銀座の二丁目
 〒745-0834 電話 二九五
 〒745-0834 電話 二九五
 FAX 〇八三四三二九五

マツノ書店

伊藤公実録

「聞き書き」で再生する 生きた人物誌

東行記念館学芸員
一坂 太郎

伊藤博文の出生地である山口県熊毛郡大和町東荷に今秋、伊藤博文記念館がオープンすることになった。ついでには、これを記念して伊藤に関する文献をひとつ復刻出版したいのだが、何が良いだろうか……。

マツノ書店の松村久さんから、こんな相談を受けた私は、迷うことなく中原邦平『伊藤公実録』(明治四十三年)と、末松謙澄著『孝子伊藤公』(明治四十四年)の二冊を挙げた。そして、どうせ復刻するのなら、ぜひ二冊一緒に出してはどうかとも言った。両書とも未だ一度も復刻されていないし、所収されている書簡や談話などが、今日なお高い史料価値を持ち続けているはずだから、記念館オープンを機に、再び世に普及させる意義は大いにあると、私は考えたのだ。

それに中原邦平と末松謙澄という、史観の違いから対立を重ね、火花を散らし続けた公爵毛利家編纂所の両巨頭が、ほぼ同時期に「伊藤博文」

という同じ主題を、どの様に扱ったかを読み比べてみるのは、興味深いことではないか。二冊同時に復刻することを私が強く望んだのも、まずここに理由がある。

かくして私の希望はかなえられ、『伊藤公実録』『孝子伊藤公』の同時復刻がここに実現したのである。

『伊藤公実録』の方の著者中原邦平は嘉永五年(一八五二)、現在の山口県大島郡久賀町に生まれた。慶応二年(一八六六)、十四歳の年には志願して長州軍に身を投じ、「四境戦争」で攻め寄せた幕府征長軍と戦っている。つまり中原自身、維新動乱の体験者であった。

そして明治四年には秋良敦之助に随って上京し、宣教師ニコライに就いてロシア語を修め、また司法省法律学校に学んだ。そして明治二十一年、毛利家編輯所に入り、以来三十余年、防長の維新史編纂に従事。晩

年には文部省維新史料編纂会常任委員も務め、大正十年三月三日、六十八歳で没した。

幕末の長州藩に在り、もろに維新の嵐を体験した中原は、「維新の歴史に採られた人たちの燃焼や苦渋をも歴史として残したかった」（中原雄太郎「想い出」という。そういう姿勢で、時には情感たつぷりの歴史書を編んだ。

一方、ヨーロッパで近代的な歴史編纂の方法論を学んで来た末松は全く正反対だった。冷酷なまでに感情を混じえず、史料から浮かび上がる史実のみを淡々と記録してゆくことに徹した。今回復刻される末松の『孝子伊藤公』が、その好例である。末松は伊藤の娘婿という立場にありながら、私的な感情を一切押し殺し、学者として伊藤の史料を収集、編纂することに努めたことが、うかがえる。

こうした末松の姿勢は、中原邦平には理解し難いものがあつたようだ。血の通わない歴史として映つたのかもしれない。とにかく視座が違うのである。それに末松謙澄は幕末の頃、長州藩と対立した小倉藩領の出身だ。中原としては旧藩意識が頭をもたげたとしても不思議はない。さらに末松を支持する伊藤と、中原を支持する井上馨の政界での対立という要素まで絡まって、二人の関係は、ますます複雑なものになっていった。

『伊藤公実録』最大の特徴は、幕末期の志士活動に焦点がしばられてゐることである。明治の元勳、政治家としての伊藤の姿は、最後の章に、「略年譜」として申し訳程度に紹介されているに過ぎない。ここに本書のオリジナリティが存在する。

中原の編む維新史の魅力は、なんといっても当事者やあるいは関係者から直接取材した談話がふんだんに盛り込まれていることである。この点、読んでいて実に面白い。中原の筆はつねに踊っていて、講談を読んでもような錯覚におちいることすらある。

かつて『伊藤公実録』を読んだ私が、最も興味をおぼえたのは、一五六頁以下の、「幕府の隠密宇野東楼」を、高杉晋作や伊藤博文、白井小助らが桜田の藩邸に連れ込んで、なぶり殺しにしたという逸話である。

中原はこの逸話を、白井や伊藤から直接、取材したという。

ところが不思議なことに、この逸話は、その後書かれた維新史の上からは、消えてしまう。大正五年は高杉晋作（東行）の五十年祭で、出版界でもちよつとしたブームが起こり、村田峰次郎『高杉晋作』（大正三年）中原邦平『東行先生略伝』（『東行先生遺文』所収、大正五年）、横山健堂『高杉晋作』（大正五年）等、次々と同郷人の手になる晋作伝が発表された。

しかし、これら一連の晋作伝記には、宇野暗殺事件が全く出てこない。どう見ても晋作のイメージダウンにつながる事件だから、顕彰を主目的とする伝記では触れなかったのかもしれない。だから最近では、晋作は柳生新蔭流の達人でありながら、生涯ひとりも人を斬らなかつたという評価まで出来上がっている。

だが、私が調べたところによれば、晋作は「観光録」と題した自筆のメモ帳の中に「宇野八郎（東楼）斬姦」という意味深な文字を残している。これが『伊藤公実録』に所収された白井や伊藤の談話と符節する。文献史料からはよく見えない部分を、談話が見せてくれたわけだ。私はこれを題材として「晋作の暗殺メモ」（拙著『高杉晋作覚え書』所収）という短い文章を書いたことがある。

関係者の談話というのは、史料として扱う場合には、よほど慎重な態度が必要であることは言うまでもない。しかし先の例で見たように、文献史料を補うものとして、活用することも可能だ。『井上伯伝』（明治四十年）『伊藤公実録』『訂正補修忠正公勤王事績』（明治四十四年）等、中原邦平が編んだ維新史の中には、まだまだ陽の目を浴びていない、元勳たちの貴重な談話が盛り込まれているように思う。

現代の研究者たちは、時代の先端を歩き過ぎて不遇だつた末松に対し、同情的だ。研究、評価もある程度進んでいる。しかし、その対極の視座から維新史を構築していった中原邦平という史家の仕事に対しても、功罪含めた、きちんとした評価が与えられるべきである。そういう時代が来ていると思うのは、私だけではない。

第四 桂小五郎随従時代

公が安政六年の八月頃來原良藏に従ふて歸國したときは、桂小五郎、

（木戸孝允公）が丁度江戸から萩へ歸つて居たときであつたが、桂は又再び政府の命を受けて、江戸へ往くことゝなつた、其時來原は桂に向ひ、此利助と云ふ男は將來見込のある男であるから、どうかおまへの手附として、江戸へ伴れて往つて呉れと云ふことを依頼した、それで公は又桂小五郎に従ふて江戸へ往くことになり、是年の九月五日に萩を出發して、十月二日に江戸へ着して居らるゝ、桂は江戸へ着すると、直ちに櫻田の藩邸に住むことゝなつた、其以前は三番町の劍客齊藤彌九郎の塾長で、常に齊藤の塾に起臥して居たのであるが、此時有備館の御用掛りを命ぜられ、藩邸へ引移ることゝなつたのである、此有備館と云ふは、天保十二年に前に話をした村田清風の建言に基き、江戸に勤番して居る藩士の

はれた、さうして又公等同志は幕府の隠密宇野東櫻を櫻田藩邸内の有備館の二階で殺したことがある、是も公使館焼討後のことであらうと思はるゝ、此宇野と云ふ男は前にもチョット話した如く、奥祐筆某の依頼を受けて、尊攘有志者の假面を被つて、公等同志の仲間へ這入り込んで、其様子を幕府に密告した者であつて、大橋順藏が捕へられたのも、此宇野東櫻の密告である、それで高杉等が、彼は我々の行動を幕府に密告する奴であるから、活かしては置かれぬ、是非殺してやろうと云ふことを決議に及んだ、そこで白井小助が好い加減のことを言ふて、宇野を有備館へ連れて来て、さうして有備館の二階で高杉と白井小助が應接して四方山の話の内に、高杉が自分の刀を出して、私は近頃斯う云ふ刀を贖ふたが、一つ御鑑定を願ひたいと言ふと、宇野が然らば拜見と言ふて、其刀を引抜いて暫く眺めて居たが、如何にも結構な御刀ですと言ふて返へした、さうすると高杉が貴方の御佩刀も一つ拜見致したいものと、云ふ

たので、宇野が自分の刀を差出すと、高杉は其刀を抜いて、切先を宇野の胸先の方へ向け、熟視する風をして、不意にズツと突込んだ、さうすると白井が後で止めを刺したと云ふやうに私は聞いて居る、此白井小助と云ふ人は後に素行と改めて七十幾つまで生きて居つたので、私が曾て訪問して、此事を聞いて見ると、あれは高杉が殺したのである、其時俺は唯だ高杉の刀で宇野の頬をブチ切つた位であるが、彼を旨くだまして連れて来たのは、俺であるとの答であつた、其時政府の役人麻田公輔、(周布政之助變名)有備館の塾長桂小五郎杯が此事を聞くや、現場へ臨んで、ドウも藩邸の内の人殺しをするやうな亂暴なことをしては困ると言ふて、叱り付けて、さうして戸棚を捜して見ると、白井の刀が匿してある、それを引抜いて見るとマダ血が拭いてない、依て麻田が白井に向ひ、貴様狼狽へたのではないか、人を殺したならば、是非跡の血は立派に拭いて置くものだと言つたと云ふ話があるので、それで此事も白井に聞いて見

ると、ナニあれば高杉の刀であるから、錆びやうが錆びまいが、コツちは関係がないので、其儘納めて置いたとの話であつた、後に天野御民の逸話記事を見ると、宇野は公が殺した様に書てあるので、何時ぞや大磯に往つて、公に聞き質した所が、吾輩が殺したと云ふ譯でもないが、皆んなが愚圖々々して居るから、一つヤツテやろうと思つて、短刀を彼れの喉へ突き付けやうとした所が、其短刀を遠藤多一が吾輩の手を執つて、直ぐに突込んで仕舞ふた、さうすると白井小助めが刀を抜いて横腹をズブ／＼刺して殺したのであると言はれた、其死骸は薦に包んで公等三四人が擔いで、屋敷の門を出て、暫く隔つた所へ棄て、仕舞つた、是は夜中の事であるが、間もなく高杉は遊びすきの男だから、馬に乗つて出懸けて、其死骸の在る所に往くと、馬がドウしても進まないで、頻りに馬を責めて、進めやうとすると片一方の鎧が切れた、飛び降りて鎧を結び付て、再び飛び乗つて見たが、矢張進まぬので、又々馬を責めると、

今度は他の一方の鎧が切れた、そこで高杉のやうな男でも不思議の感を懷いて、それ切り屋敷に歸つて來て、ドウも不思議な事があるものじやと云ふ話をした相である。

此宇野殺一件は多分十二月のことであつたろうと思ふが、同月二十一日の晩には公等の同志が三番町の塙次郎を殺したことがある、何せ殺したかと云ふと、此塙次郎と云ふ人は國學者であつて、安藤對馬守の内命を受け、廢帝の故事を取調べたと云ふ評判が尊攘志士の間に高かつたからである、是年の正月安藤對馬守を殺し掛けたのも、廢帝の事が罪状の主眼となつて居る、其れは水戸の有志者岩間金平より桂小五郎に送つた手紙の中にも明白に書いてある、其頃堀織部正利源が自殺して、安藤を諫めたと云ふことがあつて、安藤侯に上る書と云ふ一篇の文章があるが、漢文であつて、之を読むと人をして憤慨に堪へないやうな心持をさす名文である、此文章の中にも安藤侯が國學者に命じて、廢帝の故事を調